

## (安田賞) 受賞論文

## サハラ砂漠以南アフリカのキリスト教

——ペンテコステ派の興隆——

三 阪 夕 芽 子

## はじめに

2011年10月31日、世界の人口が70億人に達したというニュースが飛び込んできた。潘基文(パン・ギムン)国連事務総長が国連本部で正式に発表をし、人口増加に伴う諸問題にも向き合わなければならない、と述べていたことが印象的である(UN News 2011)。私がこの世に生まれたのは1988年、その頃の人口は約50億人、そして23歳になった現在、70億人にまで達したというのだから、約20年の間に20億人もの人が増えたことになる(UNFPA 2011: 2-3)。なんとも驚くべき数字である。しかし、全ての国の人口が一貫して増えているわけではない。日本やドイツは減少傾向にあるし、西欧諸国のいわゆる先進国とよばれる国々では増加しているものの、微々たるものである。国連事務局経済社会局(UN Department of Economic and Social Affairs: UNDESA)の2011年の調査によると、人口が増加している国々の約97%は発展途上国とよばれる地域に集中している。また、世界の人口の約60%はアジアに、約15%はアフリカに集中している。しかし、アジアの年間の人口増加率は約1%であるのに対し、アフリカでは2.3%の割合で増加しているという。それでも、アフリカ全体の女性1人あたりの出生率は減少しているが、そのなかで依然として高い出生率にある地域が、南アフリカ共和国を除くサハラ砂漠以南のアフリカ諸国(Sub-Saharan Africa)である(UNDESA 2011)。ロンドン大学公衆衛生学熱帯医学大学院(London School of Hy-

giene and Tropical Medicine)医療人口統計学者のジョン・クレランドは、サハラ以南のアフリカは、今後40年間の人口増加が2倍、3倍と進む唯一の地域となる、と想定している(UNFPA 2011: 5)。では、そのサハラ砂漠以南のアフリカとはどのような地域なのだろうか。文字通り、アフリカ北部の世界最大の砂漠であるサハラより南に位置する国々のことを指すのだが、人口増加以外にも共通した特色がある。それは、開発後進地域であるということ、そしてキリスト教が盛んであるということである。

国連開発計画(UN Development Programme: UNDP)人間開発報告書2011をみると、人間開発指数(Human Development Index: HDI)ランクの低位国にはサハラ砂漠以南アフリカの国々がずらりと並んでいる。地域別にみても、この地域の人間開発指数は圧倒的に低いことから、この地域でいかに人間開発が遅れているか、ということが分かる。次に、キリスト教徒の増加である。世界キリスト教百科事典(World Christian Encyclopedia)の統計によると、アフリカ全体のキリスト教人口は、年間約840万人(1日に約2万3000人)増えている(Barrett et al 2001: 5)。その中でも著しく増加している宗派がペンテコステ派キリスト教徒数である(ibid.: 13)。日本ではあまり聞き慣れない宗派かと思うが、私自身も2010年にアフリカ大陸を訪れるまでは、この宗派について聞いたことがなかった。私がペンテコステ派キリスト教に出会った場所はケニア・首都ナイロビ近郊で、児童養護施設の援助活動をしているケニア人女性の家に1週間程滞在させてもらったと

1) 人間開発指数は、健康(長寿)・教育・生活水準を調査したうえでの結果であるため、必ずしも経済的に発展していないことのみを示すわけではない。

きのことである。到着した翌日だったのだろうか、ちょっとした集まりがナイロビ市内であるから来ないか、と彼女に誘われ、賑やかなダンスホールのようなところに付いて行った。平日の昼間に、大音量でテンポの良い音楽が流れ、大勢の人々が音楽に合わせて踊り歌っており、クラブにやってきたような気分でわくわくしていた。しばらくすると、洒落たスーツに身を包んだ男性が、マイクと聖書を持ってステージに上がってきた。彼が壇上に立つと会場の人々の高揚感は更に増し、聴衆は一斉に祈りのような言葉を唱え始めた。ステージに上がった男性は、英語とスワヒリ語を交えながら聖書を読み叫び、それはもう力強く説教を始めたのである。そのとき初めて、これはカルト集団に違いない、危ないところに来てしまった、と冷や汗をかいたことを覚えている。周囲を見渡すと、床に俯せて泣いている人や、体を震わせて祈りの言葉を叫んでいる人などが大勢おり、私自身もあまりに衝撃的な光景に失神してしまいそうになった。集会后、彼女に一体今の儀式は何だったのか、何の宗教を信仰しているのか、と恐る恐る尋ねたところ「プロテスタントよ」という答えが返ってきた。そう、彼らはキリスト教徒だったのである。彼女は自らをプロテスタントだと称していたが、後に、現在サハラ砂漠以南のアフリカで急増している「ペンテコステ派」集団であるということが分かった。

この儀式への参加はあまりに強烈な体験だったため、どこか彼らを受け入れられずにいた。しかし同時に、力強いパワーを持つペンテコスタリズムに、何かアフリカを変える力があるのではないかと、とも考えるようになった。先述したジョン・クレランドは、急速な人口増加によって、貧困や飢餓からの脱却は更に困難になっていると述べている (UNFPA 2011: 5)。また、コロンビア大学の人口・家庭保健学部教授のステイーヴン・シンディングは、急速な人口増加は、貧しい国々に多くの難題を課しており、インフラの整備、保健や教育の基本的サービス、そして急増する若者に雇用の機会を与えることができないだけでなく、気候変動への適応もできていない、と述べている (ibid.: 5-6)。人口が急増し、貧困が蔓延し、開発も停滞しているサハラ以南のアフリカ、なぜそ

こでペンテコステ派キリスト教は凄まじい勢いで広がっているのだろうか、そしてこの地域に何をもたらすのだろうか。何も変えずに現状を維持し続けるのか、それとも貧困からの脱却、彼らがしきりに強調する「成功」や「繁栄」をもたらすのだろうか。本稿では、ペンテコステ派キリスト教の特徴や、興隆する要因を述べたうえで、サハラ砂漠以南アフリカ地域での現状や役割、今後を探っていききたい。

※本稿で扱うアフリカ地域は、主にサハラ砂漠以南アフリカ地域のことを指すので、以後「アフリカ」と略す。

※私がナイロビで参加した集会は、「ペンテコステ派」キリスト教であったが、その他にもアフリカ(特にサハラ以南)では、新しいタイプの教会が続々と増加している。サハラ以南アフリカのキリスト教系新興宗教に関する資料には、古典的ペンテコステ派教会と新たなタイプのペンテコステ派教会を包括して書かれたものが多い。もちろん、それら全ての教会が同質であるというわけではないが、霊的存在を重視する儀式の特徴の類似性などより、本稿ではペンテコステ派キリスト教と称している。

## 1. 近代化を促すペンテコステ派キリスト教

### 1-1. 宗教の復活

1960年代から1970年代にかけて、欧米を中心に世俗化論が盛んに論じられるようになった。代表的な世俗化論者である宗教社会学者ブライアン・ウィルソンは、世俗化を、近代化の進展に伴い「宗教的な諸制度や行為および宗教的意識が、社会的意義を喪失する過程」(Wilson 2002: 170)と見なした。すなわち、近代化が進み、合理的な価値観が社会の中心を為すようになるにつれて、人々や社会にとって宗教の役割が衰退していくというものである。ところが1980年頃より、宗教の復活を想起させる現象が世界各地でみられるようになった。例えば、1979年におきたイランのイスラム革命や、アメリカでのプロテスタント保守派である福音派の政治的影響力の強化(ブッシュ政権時は特にそれが顕著だったと思われる)などが挙げられる。また、2001年の同時多発テロ

事件に象徴されるような原理主義運動（ファンダメンタリズム）など宗教が関係するテロ事件が勃発しており、日本でも 1995 年にオウム真理教による地下鉄サリン事件がおきるなど、現代は宗教に関連した出来事が増加しており、宗教を抜きにして世界の事象を語る事が困難になってきた。かつては代表的な世俗化論者であったピーター・バーガーは、近代化（modernization）の過程で、宗教は社会的・個人的双方の側面において衰退することが必然だという想定は間違いであり、現代は今までにないほど猛烈に宗教的である（Berger 1999：2-3）と述べ、自らの議論を撤回している。

ペンテコステ主義運動も、その例外ではない。むしろ、現代において宗教の影響力の増加を顕著に表している事象の 1 つだと考える。現在世界中で信者が増え続けており、特にアフリカやラテンアメリカ地域においては凄まじい勢いで増加している。世界キリスト教百科事典の著者バレットらの統計によると、アフリカにおけるペンテコステ派キリスト教徒数は、1970 年代には約 1700 万人だったが、2000 年代に入った頃には 1 億 2000 万人を優に越えている。今後も増え続け、2050 年には更に 1 億人以上が加わるといふ推測も出ている（Barrett et al 2001：13）。私が訪れたケニアをみても、1970 年代に 100 万人弱だったが、2000 年代に入ってから 800 万人（国民の約 30%）を越える人々がペンテコステ派キリスト教徒になっている（ibid.：426）。集会などに参加する信者の約半数が 15 歳から 25 歳という統計も出ており、若者にも支持されていることが分かる。また、2006 年 6 月 20 日のイギリス経済誌 *The Economist* に掲載された記事で興味深いものがある。ナイロビ市内でアメリカ人黒人伝道師トマス・ジェイクス（通称 T. D. Jakes）によって行われた伝導集会に、約 100 万人のケニア人が集まったという。これは、ケニア人の約 30 人に 1 人が参加した計算になるが、政治的活動などに参加する人数よりもずっと多くの人々が参加している（*The Economist* 2006：46）。

## 1-2. 近代化とペンテコステ主義運動

私がケニアで出会ったペンテコステ派キリスト

教徒たちを見たかぎり、そしてそれらに関する資料を読んだかぎり、彼らは非常に宗教心が強いといえる。毎日何度も祈りを捧げ、仲間とともに伝道集会に参加し、「神」や「聖霊」という言葉を 1 日に何度も口にする信者たちは、まさに脱世俗化の傾向にあると考える。では、なぜ世俗化したと思われてきた現代において、宗教が復活しているのだろうか。以下、特に途上国における脱世俗化を考察した引用を 2 つ挙げる。

「…社会の個人化が個人の宗教化をもたらし、その結果、社会の再聖化や公共宗教の復興をもたらすのだ…1970 年前後から、近代化による先進国の富の蓄積が環境破壊をもたらしたり、大都市の中での新たな貧困や生活世界の破壊を伴ったりすることが露になるにつれ、近代合理主義が福音であり、近代化が善であるという信念が、広い層の人びとによって疑われるようになる。」（島蘭 2007：278）

「発展途上地域において、近代化への危機と開発の失敗によって宗教が全体的に政治化されている…またそれらの人々の中には、その人生に意義や目的を見出すために、宗教に立ち返ることによって政治的、社会的、経済的失望に 대응しようとするものも現れた。更に、近代生活における精神面の欠如への抵抗感が表されるようになった…」（Thomas 2005：149-172）

これらの引用はどちらも、近代化に嫌悪感を抱く人々が抵抗するべく、宗教に帰依する傾向があることを述べているものである。しかし、ペンテコステ派キリスト教の台頭は、「脱世俗化」を表している現象ではあるが、必ずしも近代化への抵抗を行っているわけではないと考える。ペンテコステ派キリスト教会の多くは、世俗化に抗して宗教的権威を保つために「新生（born again）」（個人の罪が赦され、<sup>バプテスマ</sup>聖霊によって新たに生まれ変わること = 聖霊の洗礼）の重要性を強調する一方で、「進歩」や「近代化」を目指す目的合理主義を掲げている（Hackett 1998）。後で述べるが、アフリカのペンテコステ派キリスト教の特徴として「成功」や「繁栄」を得ることを重視する傾向が

ある。彼らの目指す「成功」や「繁栄」というものは、物質的成功のことを指すことが多く、例えば仕事、昇進、貯蓄などの獲得を意味している (Gifford 2009: 68–69)。ペンテコステ派キリスト教は、宗教的権威を示しながらも、確実に資本主義化を押し進めており、近代化を美徳としているのである。アフリカのペンテコステ派キリスト教によって、表面的にはイコールで結ばれないような脱世俗化と近代化という2つの事象が同時並行しているように見える。人々は、それらの社会経済的成功を得る手段としてペンテコステ派キリスト教へ入信しているのだろうか。ペンテコステ派キリスト教がアフリカで興隆している要因などを述べる前に、まずは、ペンテコステ派キリスト教とは何かを、ペンテコステ派キリスト教についての先行研究をもとに説明していく。

## 2. ペンテコステ派キリスト教とは

本章では、ペンテコステ派キリスト教の起源、歴史、そして特徴について述べる。

### 2-1. ペンテコステ派キリスト教の発端と歴史

名称の由来である「ペンテコステ」は、五旬節、聖霊降臨の日を意味している。旧約聖書では、「七週の祭り」(出エジプト 34: 22、申命 16: 10)、または「刈り入れの祭り」(出エジプト 23: 16)と呼ばれており、過越の祭から50日後に行われる祭である。ギリシャ語で50番目という意味の「ペンテコステス」を語源として、五旬節と呼ばれている。この祭はユダヤ教の三大祭りの1つであり、元々は、麦の初収穫を祝う祭である。また、この日は神がモーゼに律法を授けたことを記念する日でもある。ユダヤ教徒にとって非常に特別な日であるが、キリスト教徒にとっては、収穫感謝の意味はほとんど失われ、聖霊降臨の日と認識されている(宇田ほか 1991: 1131)。その日の特別な様子が、新約聖書「使徒言行録」第2節には次のように記述されている。

五旬節の日が来て、一同が一つになって集まっていると、突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に

響いた。そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。すると、一同は聖霊に満たされ、“<sup>バプテスマ</sup>霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話した。(『聖書新共同訳』「使徒言行録」第2節: 1–4)

ペンテコステ派キリスト教徒は新約聖書に記述されている五旬節の日の出来事に基づき、聖霊が人々の下に降りてくる「<sup>バプテスマ</sup>聖霊降臨」を信じている。この経験を「<sup>バプテスマ</sup>聖霊による洗礼」(使徒 1: 5)と称し、あらゆる時代のキリスト教者に対して開かれている神の恵みである、と説いている。また聖書に記述されている通り、<sup>バプテスマ</sup>聖霊の洗礼を受けた証として、人々が理解できない言葉(異言)を語り始めることを挙げている。ペンテコステ派キリスト教の起源は諸説あるようだが、最も有力なものとしては、20世紀初頭のアメリカにあるとされている。1900年、カンザス州の牧師チャールズ・パーハムは、バイブル・スクールにて「異言を語る」ことが聖霊によって洗礼されたことを示す、と説いた。数々の都市で開いた集会には多くの人が集まり、メディアにも度々取り上げられるほどだったという。翌年(1901)、パーハム自身を含め、全校生徒のほとんどが異言を語り始め(<sup>バプテスマ</sup>聖霊の洗礼)、それはその後数日間続いたといわれている。1906年、パーハムの教え子であった黒人伝道師ウィリアム・シーモアによって、カリフォルニア州ロサンゼルスでリバイバル運動(信仰復興運動)が起こり、これが世界に広まる契機になったとされている(宇田ほか 1991: 1132–1133)。

ペンテコステ派は、聖典への回帰(“Back to the Bible”)を重要視する「<sup>バプテスマ</sup>聖典主義者」である。聖書に記述されている様々な神の業(コリント I: 12–14)を過去の出来事として留めておくものではなく、今日でも現実であるという立場をとり、聖霊の働きを求めている。ローマ・カトリック教会においても、プロテスタント教会においても、聖霊論に関してはあまり重要視されていない。聖書の記述は、原始教会の記録であるだけでなく、今日の教会の規範であるべきなのに、今日では本来の姿からかけ離れているのはなぜなのか、という問いかけがペンテコステ派の原動力となってい

る。既に述べたように、彼らは「聖霊」、「奇跡」、「賜物」を重要視している。新約聖書「コリントの信徒への手紙」第12節には、「霊的な賜物」として「病気を癒す力」「奇跡を行う力」「預言する力」「種々の異言を語る力」などの特殊な能力が、聖霊によって授けられると記述されている。ペンテコステ派の教理の要点は、①回心、②聖化、③聖霊の洗礼、の三段階であり、この段階を踏むことによって、神の救いを実現することができるという。つまり彼らは、「人は犯した罪を告白して回心すると、聖霊が降りて来て自身が聖化され、更に聖霊によって洗礼を受けることで、神による救いを得られる」（小泉 2007：271）と考えている。

2-2. ペンテコステ主義運動の発展

バレットらによると、ペンテコステ主義(Pentecostalism)には大きく分けて3つの波がある(Barrett et al 2001：20)。第1の波は、これまで述べてきた20世紀初頭に原点をもつ「ペンテコステ派」であり、現在では「古典的ペンテコステ派(Classical Pentecostalism)」と称されている。続く第2の波は、1950-1960年代から急速に広まった

「カリスマ運動」である。聖霊の<sup>バプテスマ</sup>洗礼を受けたという伝道師が主要派教会（ローマ・カトリック教会、ギリシャ正教会）にも現れ始め、キリスト教の「再生(renewal)」を主張した。そして第3の波は、1970年代以降に出現した「ネオ・ペンテコスタリズム(Neo-Pentecostalism)」である。これまでの伝道活動とは異なり、よりダイナミックな活動を展開していった。マスメディアの多用や、メガ・チャーチ（会員2000人以上の教会）での大規模な集会の開催など、大勢の人々を巻き込みながらグローバルに活動が行われるようになった。現在、アフリカを含め世界各地でみられるペンテコステ主義運動は、このような伝道活動によって広まっているのである。

現在、アフリカで急増しているペンテコステ派キリスト教徒の多くは、「ネオ・ペンテコスタリズム」の影響を受けているのだと考える。実際に2000年代に入ってから調査によると、アフリカ全体のペンテコステ派キリスト教徒の内訳は、古典的ペンテコステ派が12%、カリスマ派が25%、そしてネオペンテコステ派が63%である(Barrett et al 2001：21)。

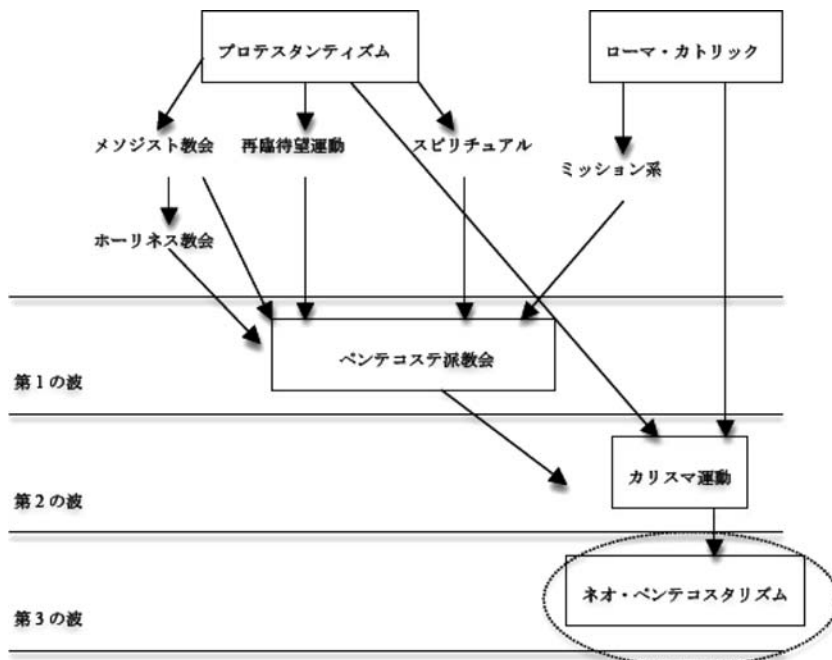


図1 ペンテコステ主義運動の3つの波 (Kay 2011：122)

### 2-3. 現代のペンテコステ主義運動の特徴

次に、現代のペンテコステ主義の特徴について述べていく<sup>2)</sup>。第1に、神からの「賜物」として授けられたという「異言」、「奇跡」、「予言」、「癒し」などの宗教的行為が挙げられる。なかでも、聖霊バプテスマの洗礼を受けた証として発することができる「異言」は、ペンテコステ派の際立った特色として知られているが、信者の誰もが簡単に発することができるわけではない。むしろ、伝道集会で異言を発する信者は稀であるという（小泉 2007: 272）。従来のペンテコステ派、特に前章で示された第1の波の時期の古典的ペンテコステ派は、異言を発することができてこそ真の聖霊バプテスマの洗礼を受けたことになる、すなわち異言を伴わない聖霊バプテスマの洗礼はあり得ないという立場をとる。そして、異言を伴う聖霊バプテスマの洗礼を受けた者こそ、奇跡や予言などの霊的体験をすることができるのだ、と認識している。しかし、現代のペンテコステ主義運動では、異言はさほど重要視されていない。それは、「霊的な賜物」の現れを聖霊バプテスマの洗礼の証として捉えていることにある。「病気を治すことができる」、「奇跡を起こすことができる」、「予言することができる」といった能力と同列に「異言を話すことができる」という能力を並べているのだ。従来のペンテコステ派の主張によると、聖霊バプテスマの洗礼にともなう異言の必然性は聖書に記されている事実だが、「賜物」が聖霊バプテスマの洗礼の証であるといった内容は、聖書には一切記されていない。現代のペンテコステ主義運動はリバイバル運動（信仰復興運動）として広まっており、聖典回帰主義であった従来のペンテコステ派からは、変化していることが分かる。

第2の特徴として、伝道活動の方法が挙げられる。歴史的に、国教を越えたグローバルな宣教は盛んに行われてきたが、ペンテコステ主義運動の伝道活動はグローバルかつ非常にダイナミックなものである。巨大なドームや野球場などのスタジアムで、カリスマ伝道師（聖霊による奇跡や予言をする力を持っているとされる）による伝道集会

が頻繁に行われ、「教会」という場にこだわらない伝道活動が広がっている。そこでは、アメリカ人伝道師が、アフリカで集会を開いたり、その逆に、アフリカ人伝道師がアメリカで集会を開いたり、相互に協力し合いながら伝道活動を行っているのである。日本でも、リバイバル運動（信仰復興運動）として活動している「全日本リバイバルミッション」という団体が主催した伝道集会が、阪神甲子園球場や日本武道館などの大きなスタジアムで行われたことがある（全日本リバイバルミッション）。この団体は、ペンテコステ派ではなく福音派が中心となっているようだが、伝道方法は非常に類似している。また、現代ペンテコステ主義運動の伝道方法の特徴には、マスメディアを巧みに利用している点も挙げられる。伝道集会では、カリスマ伝道師の著書や写真、そして伝道集会の様子を収録したカセットテープ、CD、ビデオ、DVDの販売などを行っている。更に、ラジオやテレビへの出演（televangelism）によって、不特定多数の人々に対して、広く伝道活動を展開している。ガーナとナイジェリアのペンテコステ派教会によるマスメディアの利用を調査したハケットによると、ペンテコステ派教会が利用している様々なメディアは信者によって消費される大衆文化の一つであり、宗教的な公共空間として機能している（Hackett 1998）。

第3の特徴として、聖霊や靈魂のような霊的な力の重視が挙げられる。それは、キリスト教の原理とされているものであり、現代のペンテコステ主義運動に限ったものではない。ただ、現代のペンテコステ主義者の場合、聖霊の存在を崇めるといよりも、悪魔や悪霊の存在を強調する傾向がある。例えば、ペンテコステ派キリスト教会の伝道師は“Spirit of Poverty（貧困の精霊、悪霊）”の存在を強調する。やはり、アフリカの人々の関心は貧困に集まることが多く、この霊的イデオロギはしばしば使われる。信者が貧困であり続ける要因は、“Spirit of Poverty”の存在の所為であるため、それを追い払う必要性があると説く（Max-

2) 記述した特徴が現代のペンテコステ主義運動には共通してみられるが、もちろんそれぞれの細かい活動形態などに着目していくと様々な違いをみることができるだろう。

well 1998: 357-358)。この説教は、私自身もナイロビのペンテコステ派教会で目にしたことがあり、まさに“Spirit of Poverty”を追放するために信者が祈りを唱えていた。まず、教会をサッカースタジアムに見立て、信者の全員が審判となり、赤色のカードを持つように指示される。いわゆる、サッカーの試合で審判が選手に退場を命じるときに示す「レッドカード」である。そして、“Spirit of Poverty”はその試合の邪魔をする悪霊であり、レッドカードを示して退場させなければならない、というコンセプトである。伝道師は、経済的な貧困のみならず、自分の周りに起こる不幸な出来事は全てこの“Spirit of Poverty”の仕業であるため、全員が祈り、排除すべきだということを強調するのだ。この様子はほんの一例に過ぎないが、現代のペンテコステ主義運動は、人々を苦しめる不幸などは悪魔や悪霊の仕業であるという一定の世界観を持っている。そして信者は、それらを敵視し、立ち向かい、そして追い出すことができるのが、ペンテコステ派キリスト教であると認識しているのだ。

以上のような特徴を現代のペンテコステ主義運動に共通してみることができるが、序章でも述べたように、この運動がアフリカで興隆しているということも、共通点の1つとみなすことができる。次に、なぜペンテコステ主義運動がアフリカで隆盛を極めることになったのか、その要因をみていく。

### 3. アフリカにおけるペンテコステ主義運動興隆の要因

#### 3-1. アフリカの伝統的世界観とペンテコステ主義運動

なぜアフリカでは、ペンテコステ派キリスト教がこのような状況にあるのだろうか。代表的な見方として、「2-3 現代のペンテコステ主義運動の特徴」でも述べているが、聖霊を重んじる教理がアフリカの伝統的世界観と類似していることが挙げられる。キリスト教伝来以前のアフリカ宗教

世界において、「精霊」は全ての出来事やモノに宿っていると見なされており、因果律は主に霊的な領域のなかで解釈されていた（Gifford 2009: 61）。人々の日常生活の中で起こる出来事、例えば農作物の収穫状況、天候、人の生死に至るまで、あらゆる事象は精霊という超自然的存在によってもたらされるものだと考えられてきたのだ。現代のペンテコステ派キリスト教は、霊的存在に親しみを感じる人々に受け入れられやすく、多くの共感を得たのだろう。ただ、最大の理由が、この伝統社会との世界観の共有とは考えにくい。もちろん、大きな理由の1つと考えられるが、他に現代のアフリカ社会に何か要因を見出すことができるのではないだろうかという疑問が生まれる。そのために、どのような状況で「ペンテコステ派」キリスト教が生まれたのか、その発祥地であるアメリカの当時の社会状態をみていこうと思う。

#### 3-2. アメリカ社会のアノミー

20世紀初頭に起源をもつペンテコステ主義運動は、アメリカ中西部のカンザス州で誕生し、その後テキサス州やロサンゼルスへと広がっていったといわれている。この時期のアメリカの諸都市は急速な発展の真っ直中にあり、19世紀半ばに起こった産業革命以降、いわゆる「アメリカン・ドリーム」を目指した地方出身者やヨーロッパからの移民が溢れ、彼らの多くは事業の成功、金儲け、社会的地位の向上などを期待していた。しかしながら、富を追い求め、高い地位の獲得を目指す機会があっても、誰もが成功できるわけではない。多くの人々の夢や希望といったものは現実になることはなく、打ち砕かれていったのである。更に、地方から大都市へ移転してきた人々にとっては、これまでのような共同体的な結びつきを失うことはより痛切であった。都市部では、人々は流動的であり、人間関係は浅く、かつては一般に承認されていた慣習や伝統もなかった。このようなアメリカ都市部の状況は、アノミーとして説明することができる。

本節では主に、E. デュルケムのアノミー概念<sup>3)</sup>

3) デュルケムのアノミー概念は、個人や集団相互の関係を規制していた社会的規範の動揺、衰退、崩壊などによ

を引き継いだ、アメリカの社会学者 R. K. マートンのそれをうけて述べていく。マートンは、特にアメリカ社会を例に挙げてアノミー概念を展開した。著書『社会理論と社会構造』の中で、アメリカ文化は「一定の成功目標が非常に強調される反面、これと同様に制度的手段が強調されない極端な類型に近いもの」(Merton 1973: 125) と論じている。つまり、目標は非常に強調され、手段はあまり強調されないという不均衡が存在し続けると、制度的手段に関する規範が衰退し、アノミーが発生するというのだ。その目標とは、神聖化されている富や金銭などの獲得であり、更にそれらを得ることによって確立する社会的地位を意味する。そのような成功は誰でも手に入れることができるわけではないが、周囲(家族、学校、メディアなど)からは、大望をいつまでも保持させようとする不断の圧力が加えられる。マートンによると、アメリカ社会は、人々に目標の保持を強調すると同時に、その目標を断念することの屈辱さを強調している。

アメリカ文化は、三つの文化理論の承認を命じている。すなわち、第一に、同じ高遠な目標に向かって努力せねばならない。第二に、現在失敗だと思われるものも、最後の成功にいたる中間駅であるにすぎない。第三に、真の失敗とは、大望を手加減したり引込めたりすることにほかならない。(ibid.: 128-129)

しかしながら、それらの目標を実現するための具体的な手段はほとんど提供されない。特に下層社会に属す人々は、合法的な目標達成の手段を手に入れる機会がほとんどないため、禁止された手

段を使ってでも実現しようとするがゆえに逸脱行為を引き起こす。まさにマートンの説いたアノミー論は、ペンテコステ派キリスト教が現出してきた頃の、アメリカ社会の状況を示していると考えられる。

### 3-3. アフリカ社会のアノミー

私が注目する現代のサハラ砂漠以南のアフリカ社会は、19世紀初頭のアメリカでペンテコステ派キリスト教が発生した状況と同様に、アノミー状態であるがゆえにペンテコステ派キリスト教が増加の一途をたどっていると考えられる。ほとんどのアフリカ諸国は19世紀末のヨーロッパ諸国による植民地支配を受け、「文明化」の名の下でアフリカの西洋化が始まった。1950年代から1960年代にかけて、多くのアフリカ諸国は植民地支配からの独立を果たしたものの、西洋化の勢いは今なお衰えることなく進んでいる。1980年代に入ってから、途上国に対してIMF(国際通貨基金)や世界銀行による構造調整プログラム<sup>4)</sup>が推進されるようになり、アフリカも例外ではなかった。その結果、雇用や所得の減少、失業率の増加、商品価格の上昇などの経済問題をはじめ、教育や保健サービスの水準も低下した、との報告が出されている(UNICEF 1987: 2-4)。伝統的な社会を保ってきたアフリカは、植民地化による西洋文化の流入によって、破壊的な文化接触を受けることとなった。また、近代化が急速に進み、更に都市化、資本主義化と次々に押し寄せる異文化の波にさらわれたアフリカ社会は、まさにアノミー状態にあるといえるのである。

アメリカでペンテコステ派キリスト教が誕生し発展した時のように、現代アフリカでは貧困や失

、って生じる混沌状態、社会成員の欲求や行為の無規制状態を示す。デュルケムは2つの用法でアノミーを概念化している。まず『社会分業論』(1893)では、産業化された社会での伝統的価値や、社会的基準の喪失、社会的紐帯の崩壊などによって、社会の秩序が不安定な状態になることを表している。次に『自殺論』(1897)では、欲求を規制するような道徳的規範の弱体化、逆に欲求を過度に刺激肥大化させる市場経済などによって、人々の欲求が無制限にふくれあがり、その満たされない欲求が人々をアノミー的自殺に追いやる<sup>1)</sup>と説いた。(丸山 2005、日本社会学会 2010)

4) 構造調整プログラムは、累積債務問題に対処するために、世界銀行と国際通貨基金(IMF)によって、途上国政府の財政や産業政策に条件をつけ返済を保証するプログラムである。通常、歳出のきりつめ、通貨の切り下げによる輸出競争力の強化と輸入の抑制、輸出産業の復興、金融の自由化、国営企業の民営化などが求められる。市場のメカニズムを利用して輸出を増やし、返済を可能にするプログラムだが、通貨の切り下げは輸入品の金額を上げ、補助金の削減とともに貧困層の生活へ大きなダメージを与えた。(朽木 2003)



業率の増加をはじめとする厳しい状況のなか、不幸からの脱却や共同体の維持などといった理由でペンテコステ派キリスト教に帰依し、安堵感を得る人は多いと考えられる。ただ、ペンテコステ派キリスト教は「成功」や「繁栄」などといった物的欲求の獲得を非常に強調する。果たして、現在のアフリカの厳しい状況下において皆がそのような目標を達成することができるのだろうか。アノミー状態に陥った人々が、そこからの脱却のためにペンテコステ派キリスト教徒になり、そこでは「成功」や「繁栄」などの目標のみが異常に強調されている。そして、その目標を達成するために伝道師が説くことは、祈ることと、不幸の原因とされる悪霊の所為にすることだけである。神に祈りを捧げ、悪霊を糾弾することによって「成功」や「繁栄」を手にすることができる、という認識を彼らが実際に持っているか否かは定かではないが、ペンテコステ派キリスト教信者になることで、なんらかの期待感は膨らむことであろう。しかし、ほとんどのアフリカ諸国の現状をみる限り、彼らの夢や目標は実現できるような状況にはない。信者は伝道師のメッセージに夢を膨らませるが、実際にはその目標を達成することができないのが実情なのである。この状況は先に述べた、マートンが挙げたアメリカ文化の「目標を保持させるための不断の圧力」と類似している。現在アフリカ大陸全体で急速に勢力を増しているペンテコステ派教会、ウィナーズ・チャペル (Winners' Chapel) の調査を行ったギフォードによると、伝道師は目標達成が困難な信者に対して次のような教を説いている。

2007年の元旦、ナイロビのウィナーズ・チャペルでは、会衆に対して車や家の窓に貼るステッカーを購入するように呼びかけがなされた。また、車や家を所有してはいないがそれらを1年以内に入手したいと思う者についても、やはりステッカーを教会で購入して、毎日それに対して祈禱するようにとの指示が出された。さらには、「もし、10台の車が欲しいなら10枚のステッカーを買い、毎日それらに対して祈りなさい」というメッセージさえ語られたのである。ナイロビのウィナーズ・チャペルはアフ

リカ最大のスラムといわれるキベラの端に位置しており、同教会に通うほとんどの人々には、2007年末までに10台どころか1台の車さえも入手できないことは自明であった。(Gifford 2009: 73-74)

このように、ほとんどのペンテコステ派キリスト教徒にとって「車や家を所有する」という目標は達成困難であるにもかかわらず、車や家を購入する手段として信者に与えられているのは「ステッカーの購入」と「祈り」のみである。そして、伝道師の教えに忠実に従ったとしても、車や家を獲得できるチャンスはほとんど無い。この状況は、第2の新たなアノミーを引き起こすのではないだろうか。植民地化以降の近代化や資本主義化によってもたらされた貧困や失業などのアノミー状況から脱出するために、ペンテコステ派キリスト教徒に入信したはずの信者は、そこでもまた達成困難な目標と手段の不均衡によってアノミー状態に陥ることになる。結局何をしても成功できないと、更に絶望するのではないか。そして信者は、教会や伝道師からの圧力により、逸脱行為や教会の否定を行う可能性が考えられる。しかし、それでもなおペンテコステ派キリスト教は拡大し続けている。

それは、ペンテコステ派キリスト教徒になることでは貧困から脱却することは不可能である、ということを経者ら自身が理解していることに起因しているのかもしれない。植民地化後の社会変動にともない勃発したあらゆる諸問題を、ペンテコステ派キリスト教によって正当化し、何らかの意味付けをしようとしているのではないか。様々な困難や問題があるが、それらを「悪霊」や「悪魔」の仕業とすることで解決しようとしているのではないか。彼らは、第1のアノミーから脱却するためではなく、アノミーの原因となっているものを説明するためにペンテコステ派キリスト教に帰依しているとも考えることができる。元々ペンテコステ派キリスト教は、発祥の地であるアメリカの都市部をはじめアフリカやラテンアメリカ社会などの、恒久的な貧困や生活不安などが蔓延するアノミー状態を背景とする宗派であった。アノミー状態から脱出するというよりは、アノミー状

態を正当化するため、個人的な不安定状態を納得させるためにペンテコステ派キリスト教を利用しているように思える。アノミー状態にある地域でペンテコステ派キリスト教は急増すると仮定すると、アフリカでペンテコステ派キリスト教が人々を魅了してきた／しているのは、アノミー状態がその大きな要因であるからだといえよう。

しかし、果たしてそのようなアノミー状態を、現在のままにしていけるのだろうか。アフリカでは、いまなお多くの人々が極度の貧困状態にあるし、人間開発指数も凶抜けて低い。ただ、ペンテコステ派キリスト教は近代化を押し進める傾向があることを述べたように、アフリカの成長を阻止する原因になるとは思えない。一方で、ペンテコステ派キリスト教は、社会的経済的不安、貧困、病気などの原因をどこか不透明に概念づけ、逃避しているようにみえる。次に、このようなペンテコステ派キリスト教がアフリカに与える影響を述べていく。

#### 4. アフリカを動かすペンテコステ派キリスト教

ペンテコステ派キリスト教は、アフリカに何をもたらすのだろうか。まず、宗教がアフリカをはじめ発展途上地域にどのような影響があるとみなされているかをみた後、ペンテコステ派キリスト教の今後について述べていく。

##### 4-1. 宗教と発展途上地域

特定の宗教に関わりなく発展途上地域において宗教が興隆していることは、様々な文献で確認することができる。その要因として主に、物的成功や将来性がないために、埋め合わせとなり得る宗教に帰依しているということが挙げられている (Berger 1999, Haynes 2007)。また、発展途上地域における極貧の人々のなかには、自らのアイデンティティの確立に際して、信仰を必要不可欠な要素だとする者も多く存在する。宗教的信仰によって何かしらの精神的安らぎを得ることができるため、信仰がなければ生きていく意味がないと感じる。まさに、宗教は満足感や幸福感といった人間に直接的に結びつく重要な役割を担っているとい

うのだ (Sen 2000)。更に、21世紀に入ってまもなく世界銀行が行った「貧者の声 (Voices of the Poor)」という研究は、自分でも貧しいと自覚しており、また周囲の人からも窮乏であると判断された60カ国の6万人以上の人々が、何を幸せと感じるかという声を集めたものである。そこでは多くの人々は、宗教儀式などの精神的な営みによる調和 (harmony) を幸福の要因とした (Narayan et al. 2000)。ただ、宗教を信仰することによって幸福感を得たり、アイデンティティの確立が行われていたりしても、発展途上地域の極度の貧困状況や経済的格差など、取り組むべき課題は数多くある。ロンドン・メトロポリタン大学の宗教・紛争・協力センター (The Centre of Religion, Conflicts and Cooperation) 所長ジェフリー・ハインズによると、これまでは経済、政治、開発などの諸分野から排除されてきた宗教の重要性は認識されつつあり、また宗教を介して開発を進めることの可能性が大いにある (Haynes 2010: 85-100)。

##### 4-2. ペンテコステ派キリスト教への期待と不安

ペンテコステ派キリスト教会もその一例であり、信者たちはアノミー状態からの回避、自身らのおかれた状況に対する意味づけとして、信仰を重要なものとしてみなしている。厳しい状況のなかで生活するために、ペンテコステ派キリスト教に帰依することは不可欠なのである。更に、宗教社会学者のデイヴィッド・マーティンは、宗教が「開発」分野における重要性を発揮するというハインズの立場に依拠しながら、ペンテコステ派キリスト教は多くの貢献をしていると主張する。

ジェンダー、世俗法、トランスナショナルリズム、ボランティアリズム、多元主義、民主主義、核家族、平和主義、個人作業の規律、消費、現代的なコミュニケーション、社会的・地理的流動性などの様々な分野で近代化と積極的に関わっている。(Martin 2005: 144)

つまりペンテコステ派キリスト教会は、グローバル化が進む世界にアフリカを融合するために重要なあらゆる要素を包含する役割を担っている、ということである。例えばジェンダーに関してい

えば、アフリカではこれまで女性が権力を持つことはあまり認められなかった一方で、ペンテコステ派キリスト教会では、女性の伝道師も多くみられる (Maxwell 1998: 355-356)。これらの分野を、ペンテコステ派キリスト教という人々に近い存在である組織が担うことは、非常に意義がある。

また、ペンテコステ派キリスト教は聖書を重視しているため、聖書を読み書きすることの重要性を強調している。聖書やペンテコステ派キリスト教に関する雑誌や著書を読まざるを得ない状況になるため、識字能力の向上を期待することができる。更に、結婚生活での不貞は論外であり、喫煙や飲酒は非常に罪深い行為とみなされている。これらの規律を守ることによって、夫がこれまで煙草、酒、ドラッグ、売春などに使っていたお金を、家庭に向けるようになり、子供への教育費や貯金に充てるようになったという調査結果も出ている (ibid.: 353)。家庭内で金銭を使うことが最も多い男性が禁欲的になることで、家計の経済状況が向上する可能性もある。また、両親が教育への関心を持つことは、子供の就学率の上昇に期待できるだろう。このように、ペンテコステ派キリスト教は、近代化の一助となるのみならず、よりよい生活状況を確保するための開発にもつながることが期待できる。

しかし、その一方でペンテコステ派キリスト教は、楽観視できない要素も抱えている。それは、前章でも述べたように、貧困や社会経済的不安の原因を曖昧に解釈していることにある。現在、アフリカ各地に広まりつつあるブラジル生まれのペンテコステ派教会「神の国ユニバーサル教会 (Universal Church of the Kingdom of God)」のジンバブエ教会を調査したギフォードはこのように述べている。

生活のあらゆる分野で悪霊、悪魔、霊的な力が作用し、それらが全ての災禍の原因とみなされていた。霊と妖術が、病気、窮乏、貧困、飢え、不幸、失業、さらには HIV/AIDS の原因とされていたのである。そこでは、問題への対処法は構造的な欠陥の考察や政治的な改革の実

施ではなく、HIV/AIDS のような病気の場合でさえ、よりよいヘルスケアや医療の提供とはならない。すべての問題解決は、その根本原因となっている悪しき霊の診断と聖職者による悪霊祓いに帰結してしまうのである。(Gifford 2009: 58)

実際問題として、上記のようなアフリカの諸問題である病気、貧困、失業などの根本的な原因は、政治的腐敗や医療サービスの不足などであり、決して「悪魔」や「悪霊」だけに起因するものではないことは明らかである。世界銀行による2010年の報告書では、公務員によって提供されるべきサービスが国民に行き渡っていないことや、教員が勤務時間の15~20%の時間を仕事以外に費やしていることなどが問題視されている。また、診察設備の不備や薬剤の横領、医療従事者の不在などにより、救えることが可能な命が落とされている事態も発生している (World Bank 2010)。このような構造的・制度的欠陥が存在しているにもかかわらず、批判の矛先は国家、政治家、政策などに向けられてはいない。ペンテコステ派キリスト教の伝道師は、全ての諸悪の根源を悪霊や悪魔といった問題に集約し、個人的な道德性のみを強調することで解決しようとする。目を向けるべき問題に取り組みなければ、アノミー状態に包含される諸問題は解決不可能だろう。この点を考えると、ペンテコステ派キリスト教の興隆によって、アフリカの人々はアノミー状態に拘束され続けるのではないかと懸念してしまう。

## おわりに

今後、アフリカにおいてペンテコステ派キリスト教はどのように展開していくのだろうか。「4-1 宗教と発展途上地域」で述べたように、宗教は発展途上地域において、人々から不安感を取り除き、癒しを与える存在となり得る。その点に関しては、ペンテコステ派キリスト教は非常に重要な役割を果たすことができるだろう。ただ、諸悪の根源を全て悪霊や悪魔の仕業とみなし、根本的問題を追求しない姿勢をとり続けることには強い不安を感じる。そして、伝道師が説く「繁栄」と

「成功」という目標の強調からは、ペンテコステ派キリスト教が「宗教」という枠組みを越え、形を変えていくことすら懸念される。伝道師は、信者の目標を促すというよりは、彼ら自身のそれを獲得するために「繁栄」や「成功」を強調しているのではないだろうか。聖書に忠実に従うというペンテコステ派キリスト教徒の伝道師は、布教の場では、聖書の「からし種の信仰」（マタイ 13：31-32）<sup>5)</sup>の実践を説く。それは、豊作を得るには種まきから始めなければならないということ述べているもので、つまり、信者たちが「繁栄」や「成功」などの大きな目標を達成するには教会に献金しなければならないということの意味している。ケニアの Maximum Miracle Centre の伝道師は、「もし富を得たいなら、唯一の秘訣は与えることです」「収入の 10 分の 1 を捧げるならば、あなたの金銭的な扉は開かれるでしょう。もし捧げないならば、閉じられたままでしょう」という教えを説いている（Gifford (2009) の論文による）。信者からの捧げ物に対する報酬として、神や聖霊からの祝福を強調することは、社会的に悪用されやすく、実際に教会の指導者らによる横領事件は頻繁に起こっている（Gifford 2009：75）。ペンテコステ派キリスト教が産業化することに対する嫌悪感がアフリカ全体に広まりつつあることも指摘されている（ibid.：76）。ペンテコステ派教会は、アフリカの人々の豊かな生活を助長する側面を持ちつつ、逆にアフリカの発展を妨げる要素も大いに孕んでいるのだ。

「はじめに」でも述べたように、世界全体で人口の爆発的増加が進んでいる。グローバル化が進行する中で、その大半を占める発展途上地域や、これからも人口の急増が予測されているアフリカの現状とはどのようなものだろうか。そこでは、救えるはずの命が救われなかったり、受けられるはずの教育が受けられなかったり、1日1ドル未満で生活する人々が大量にいることは、どこかもどかしい。その状況からの脱却する、または自身の生きる意義を見出すための手段としてしばしば使

用される宗教は、人間にとって重要な意義があるように思える。非常に流動的な地域であるアフリカ、また人口増加とともに勢力を増すペンテコステ派キリスト教を、今後も注視し続ける必要があるだろう。

#### 参考文献

- Barrett, David B., George T. Kurian and Todd M. Johnson, 2001, *World Christian Encyclopedia: A comparative survey of churches and religions in the modern world: volume 1*, Second edition, New York: Oxford University Press.
- Berger, Peter L., 1999, "The Desecularization of the World: A Global Overview," Berger, Peter L. ed., *The Desecularization of the World: Resurgent Religion and World Politics*, Washington, DC/ Grand rapids, Michigan: Ethics and Public Policy Center/ William B. Eerdmans Publishing Company.
- Durkheim, Émile, 1912, *Les formes élémentaires de la vie religieuse: le système totémique en Australie*, Paris: Librairie Ferix Alcan (= 1975, 古野清人訳『宗教生活の原初形態』岩波文庫).
- Economist, 2006, "Hallelujah! The Rise of Pentecostalism Could Change The Face of Kenya," 380 (8487), July 20.
- Gifford, Paul, 2009, "Africa's New Pentecostal Christianity" (= 落合雄彦訳「アフリカの新しいペンテコステのキリスト教」) 落合雄彦, 『スピリチュアル・アフリカ——多様な宗教実践の世界』晃洋書房, 57-80.
- Hackett, Rosalind I. J., 1998, "Charismatic/Pentecostal appropriation of media technologies in Nigeria and Ghana," *Journal of Religion in Africa*, 28(3): 258-277.
- Haynes, Jeffrey, 2007, *Religion and Development: Conflict or Cooperation?*, Palgrave Macmillan. (= 2010, 阿曾村邦明・智子訳『宗教と開発——対立か協力か?』麗澤大学出版会.)
- Kay, William K., 2011, *Pentecostalism: A Very Short Introduction*, Oxford University Press.
- 小泉真理, 2007, 「グローバリゼーションとしてのペンテコステ主義運動——タンザニアのキリスト教徒

5) 「また、ほかの譬（たとえ）を彼らに示して言われた、『天国は、一粒のからし種のようなものである。ある人がそれをとって畑にまくと、それはどんな種よりも小さいが、成長すると、野菜の中でいちばん大きくなり、空の鳥がきて、その枝に宿るほどの木になる』」（『聖書新共同訳』「マタイによる福音書」第 13 節：31-32）

- たち」阿部年晴・小田亮・近藤英俊編『呪術化するモダニティ——現代アフリカの宗教的実践から』風響社, 263–298.
- 朽木昭文, 2003, 「構造調整政策と産業政策」ジェトロ・アジア経済研究所編『テキストブック開発経済学』有斐閣, 第16章.
- Martin, David, 2005, *On Secularization: towards a revised general theory*, London: Ashgate.
- 丸山哲央編, 2005, 『新版 新しい世紀の社会学中辞典』ミネルヴァ書房.
- Maxwell, David, 1998, “‘Delivered from the Spirit of Poverty?’: Pentecostalism, prosperity and modernity in Zimbabwe,” *Journal of Religion in Africa*, 28(3): 350–373.
- Merton, Robert King, 1949, *Social Theory and Social Structure: Toward the Codification of Theory and Research*, Free Press. (= 1973, 森東吾ほか『社会理論と社会構造』みすず書房).
- Narayan, D. with Patel, R., Schafft K., Rademacher, A. and Koch-Schulte, S., 2000, *Voices of the Poor: Can Anyone Hear Us?*, Oxford University Press.
- 日本社会学会社会学事典刊行委員会編, 2010, 『社会学事典』丸善株式会社.
- 日本聖書協会, 2007, 「使徒言行録」第2節1–4, 『聖書新共同訳』日本聖書協会.
- Sen, Amartya, 1999, *Development as Freedom*, Alfred A. Knopf. (= 2000, 石塚雅彦『自由と経済開発』日本経済新聞社).
- 島蘭進, 2007, 『スピリチュアリティの興隆——新霊性文化とその周辺』岩波書店.
- Thomas, Scott M., 2005, *The Global Resurgence of Religion and the Transformation of International Relations: The Struggle for the Soul of the Twenty-First Century*, New York and Basingstoke, UK: Palgrave Macmillan.
- 宇田進ほか, 1991, 『新キリスト教辞典』いのちのことは社.
- UNDP, 2011, “Sustainability and Equity: A Better Future for All,” *Human Development Report 2011*, the United Nations Development Programme.
- UNFPA, 2011, “People and Possibilities in a World of 7 Billion,” *The State of World Population 2011*, the United Nations Population Fund.
- UNDESA, 2011, *World Population Prospects: The 2010 Revision*, the United Nations Department of Economic and Social Affairs.
- UNICEF, 1987, “The State of the World’s Children 1987,” the United Nations Children’s Fund.
- UN News service, “As world passes 7 billion milestone, UN urges action to meet key challenges,” 31 Oct. 2011, UN News Centre (<http://www.un.org/apps/news/story.asp?NewsID=40257>) 2011年12月1日アクセス.
- Wilson, Bryan R., 1970, *Religious Sects: A Sociological Study*, London: George Weidenfeld & Nicolson Ltd. (= 1972, 池田昭訳『セクト——その宗教社会学』平凡社. = 1991, 改訳『宗教セクト』恒星社厚生閣.)
- , 1982, *Religion in Sociological Perspective*, Oxford University Press. (= 2002, 中野毅・栗原淑江訳『宗教の社会学——東洋と西洋を比較して』法政大学出版).
- World Bank, 2010, *The World Bank Annual Report 2010: Year in Review*, the World Bank.
- 全日本リバイバルミッション, (<http://www.j-revival.com/>) 2011年12月1日アクセス.